

熊本大学附属図書館報

# 東光原 41

Kumamoto University Library Bulletin

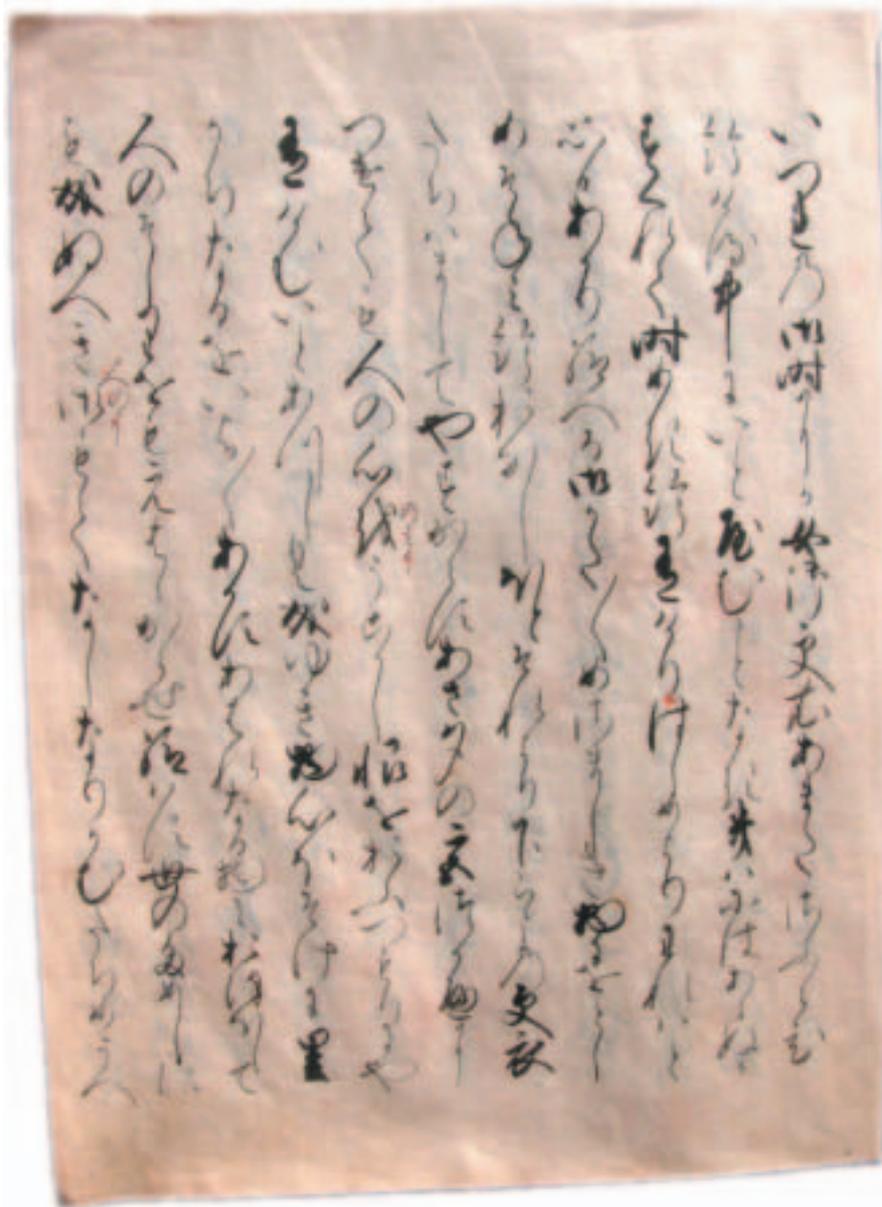
ISSN 0917-7604

<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>

March 2005

特集

## 図書館 ガイダンス



## 特集 図書館ガイダンス

# 導入教育と図書館ガイダンス

本間 里見

□ 大学における課題探求型の自主的な学習は、受験のための知識習得型の学習が中心であった高校までの受身の学習とは大きく異なる。この学習方法のスムーズな転換を促すために多くの大学では、一年次に導入教育を実施している。



この導入教育においては、情報活用能力や問題解決能力を育成することは重要な課題である。

2000年11月22日の大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」において、グローバル化時代を担う人材として、学際的・複合的視点に立って自ら課題を探求し、論理的に物事をとらえ、自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことができる能力が必要としている。また、そのためには主体的に情報を収集し、分析し、判断し、創作し、発信する能力を養うことが不可欠であるとしている。

すなわち大学教育にとって、広義の情報リテラシーの必要性を意味している。(情報リテラシーは、コンピュータリテラシーと同一視されること

が多いが、ここではアナログメディアを含めた情報活用能力の育成を指す) この広義の情報リテラシーは、今後、ますます大学における学習の柱となるであろう。

□ 本学では、情報リテラシー科目として、一年次に情報基礎A・Bが必修科目として設定されている。この科目は、総合情報基盤センターによって、しっかりとしたカリキュラムで実施されており、コンピュータリテラシーの取り組みとしては高い評価が得られている。

一方で、大学教育のオリエンテーション科目として、基礎セミナーが設定されている。基礎セミナーでは、教員が設定したテーマで少人数クラス(20名)を編成し、大学のイントロダクションや基礎的なスタディスキルズ(調べる、書く、発表する、討論する、等)の習得により、大学教育への導入を目指すものである。テーマはバラエティに富んでいるが、発表や討論が中心の授業が多く、それらの授業では担当教員から、それぞれの工夫の元に文献の検索方法や活用方法が教授されている。

しかし、情報基礎A・Bと基礎セミナーだけで、広義の情報リテラシーは十分とはいえない。情報基礎科目は、コンピュータリテラシーが中心であるし、基礎セミナーは、討論や発表が中心で、その下調べに必要な情報の集め方や活用方法等のスキルを系統的に学習しているわけではない。広義の情報リテラシーは、やはり、図書館と連携して実施するべきであると考えられる。

□ 本学の新生の状況はどうか？基礎セミナーの授業アンケート<sup>注1)</sup>から新生の考え方がみえてくる。表1は、学生からの基礎セミナーへの要望で

(表1) 今後、基礎セミナーを改善し充実するために、授業担当者(教員)への要望を挙げて下さい。(複数回答可)

内容や教え方などを工夫して欲しい	19.8%	課題を設定し考える時間が欲しい	9.6%
資料を準備して欲しい	9.8%	参考文献を多く紹介して欲しい	15.4%
授業に一貫性があるようまとめる	7.2%	レポートの回数を多くして欲しい	1.0%
レポートの回数を少なくして欲しい	7.3%	発表・討論を多くして欲しい	7.6%
発表・討論を少なくして欲しい	5.8%	他学部の人と議論できる工夫	22.5%
その他	11.7%	無回答	18.8%

ある。まず、「他学部の人と議論できる工夫」、「内容や教え方などを工夫して欲しい」といった授業運営に関する要望が挙げられている。ここで注目すべきは、「参考文献を多く紹介して欲しい」が続くことである。

基礎セミナーでは、レポートの作成や発表・討論のための下準備が課されることが多い。そのため参考文献が必要になるが、新生は適切な参考文献を紹介して欲しいのである。教員から見れば、参考文献の選び方やその活用方法は学生自身が独自に獲得していくものだと考えがちである。しかし、小中高校までの学習の中で、必要な文献・情報を図書館で集めるという訓練を受けてきた新生はほとんどいないのが現状であろう。

この訓練こそが導入教育には必要であると考えますが、かならずしも情報リテラシーの専門ではない教員が、基礎セミナーで教えることには限界がある。

□ では、教員は新生のことをどう感じているのだろうか？表2は、担当した教員の新生一般に特に不足していると感じられた基礎的素養についての回答である。まず、「口頭表現能力」と「討論能力」が挙げられており、自分の考えを伝える能力が不足していると感じている。

新生はゼミ形式の授業に不慣れでとまどっているということもあるが、自分の考えを説明するための下準備ができていないこと、関連する知識や経験が不足していることにも起因している。また、「一般的知識」が不足していると感じている教員も多い。

この結果からは、教員は学生にスタディスキルズよりもむしろコミュニケーション能力を求めているように思われる。しかし、スタディスキルズがなければ、発表も討論も消極的になるのは当然であり、新生がかかえる潜在的な問題に気づいていないのかもしれない。

(表2) 今年度の基礎セミナーを担当された限りにおいて、新生一般に特に不足していると感じられた基礎的素養はどのようなものでしたか。

一般的知識	33.0%	文章の読解力	8.8%
数学的推理能力	3.3%	論理的思考能力	30.8%
直観的把握力	3.3%	想像力	23.1%
実験・実習能力	5.5%	文章表現能力	18.7%
口頭表現能力	41.8%	討論能力	39.6%
思い当たることは無い	9.9%	その他	23.1%

□ 現在の図書館は電子化がすすみ多様なレファレンスサービスを提供している。利用方法を知っていれば非常に便利になるが、利用方法の習得なしで図書館

を使いこなすことは難しくなり、利用のハードルは高くなっていると思われる。

一方で、安易にインターネット上の情報をそのまま利用したようなレポート作成も増えている。インターネット上の玉石混淆の情報から適切な情報を引き出すためのスキルも必要であるし、著作権やセキュリティの問題に対しても正しい知識が要求される。このインターネット上の情報検索技術もますます重要なスタディスキルズとなるであろう。

□ 図書館の情報化、ネット社会の浸透に伴って、スタディスキルズの内容も充実させていかなければならない。

試みとして、2004年度、基礎セミナーの1授業コマを使って、図書館ガイダンスを実施した。この基礎セミナー・図書館ガイダンスは、受講した学生も担当教員からも、おおむね好評<sup>注1)</sup>であった。

しかし、1時間の講義形式によるガイダンスのみで情報検索のスキルは身に付くものではなく、自ら図書・資料を検索するためにOPACを使わなくては意味がない。基礎セミナーの授業の中で、図書館ガイダンスから連続して図書館活用を促すことが必要であろう。

□ 今後、本学の導入教育において、図書館と連携して広義の情報リテラシー教育に総合的に取り組める可能性は十分にある。例えば、OPACなどの操作方法などは、情報基礎の授業で実習することは可能であろう。

また、基礎セミナーにおいて図書館ガイダンスを単なる図書館利用ガイドにとどまらず、情報の検索、選択、活用、まで授業内容に系統的に取り込むことも可能であろう。すでに学術文献の収集やその活用为重点をおいた授業として、総合科目「情報メディアとネットワークの活用」も実施されている。

さらに、専門教育の中でも、ある専門のテーマ

についての情報を掘り下げるような情報検索のワークショップなどを設定することも可能であろう。

□ 情報化社会では、情報の鮮度が落ちるのもはやい。(もちろん、保存食のようにいつまでも食べられる情報も当然あるが) 今後は、大学が学生に与えるのは、知識よりもむしろ、新しい知識を如何に獲得するか、如何に活用するか、といった方法そのものが重要となってくる。その方法こそが、学生にとって色あせない生涯の資産となるであろう。その意味で、導入教育と図書館の連携の意味は大きい。

---

注1) 基礎セミナー授業アンケートは、2004年度前期の基礎セミナー最終週に実施した。対象は前期受講生(新入生全体の約85%)と88クラスの担当教員で、回答数は受講生が1177件、担当教員が91件であった。

注2) 基礎セミナー・図書館ガイダンスについての受講者のアンケートは、附属図書館の方でまとめられ、報告されている。

(ほんま りけん

大学教育機能開発総合研究センター助教授)

#### 【表紙の言葉】

今号の表紙は、熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵寄合書き『源氏物語』(丑上-三)から青蓮院尊朝親王筆「桐壺」のはじまりの部分です。

## 特集 図書館ガイダンス

## 平成16年度利用者ガイダンス等実施報告

伊波ひとみ

附属図書館では、より多くの方々に図書館サービスの内容を理解していただき、様々な情報資源を活用していただくために、各種ガイダンスや説明会を開催しています。平成16年度の活動を以下に報告します。

平成17年度は基礎セミナーとの連携を更に深め、新入生全員に対して図書館ガイダンスを実施する予定です。在学生や教職員向けのガイダンスについても、会場の確保や使用するデータベースの同時アクセス数の不足など課題もありますが、更に内容を充実させていく



予定です。

具体的な開催日程が決まり次第、図書館ホームページ等でご案内しますので、是非ガイダンスにご参加ください。

最後に、図書館ガイダンス中級編の受講者から寄せられた感想を紹介しておきたいと思います。

「開催されていることと、その内容をあまり今まで知りませんでした。参加してみてもとてもタメになるものだと思いましたので、バンバン宣伝していってほしいなと思います。」

(雑誌コース:教育学部4年)

### □ 図書館主催のガイダンス

#### ①入門編

日 程 平成16年4月5日～4月16日10日間34回（1回30分・定員30名）  
 会 場 中央館  
 対 象 新入生優先  
 内 容 図書館利用案内（10分）＋館内ツアー（20分）  
 参加者 483名

#### ②中級編

日 程 平成16年11月9日～11月30日14日間23回（1回70分・定員20名）  
 会 場 中央館会議室  
 対 象 学生、院生、教職員

内 容 ①新聞記事の探し方、②雑誌論文の探し方、③所蔵の調べ方の3コース制  
参加者 168名



#### 基礎セミナー内図書館ガイダンス

日 程 全8回  
前 期：平成16年4月22日5限、4月23日3、4、5限、4月30日3、4限  
後 期：平成16年10月8日4、5限  
会 場 大学教育センター棟 C301教室  
対 象 基礎セミナー受講者（新入生）  
内 容 パワーポイントを用いたプレゼンテーション形式の講義（約50分）  
図書館の概要、利用案内、資料の探し方、OPAC の使い方、図書館ホームページの紹介  
参加者 41クラス663名（前期35クラス588名、後期6クラス75名）



#### データベース説明会

##### ① EBMR/MEDLINE 説明会

日 程 平成16年6月17日17：00～19：00  
会 場 医学部総合研究棟3階情報演習室  
内 容 Ovid 社インストラクターを招いて、EBMR と MEDLINE の利用方法の説明と実習  
参加者 29名



#### 授業への協力

①「化学セミナー」坂本・菊池先生担当の1コマ（5月21日4限目：理学部3年生36名）  
電子ジャーナルの概要説明と実習

②「材料科学実験Ⅰ」森園先生担当の1コマ（10月13日3限目：工学部2年生55名）  
" 図書館とインターネットを利用した情報検索 " について解説と簡単な OPAC 演習を実施

(いは ひとみ 図書館サービス課電子サービス係)

## 2004年熊本大学ハーン展示会・講演会のこと

西川 盛雄

ホップ・ステップ・ジャンプがこの事業を始めるときのキーワードであった。一年目はおずおず、二年目は少し確信をもって、そして三年目は胸を張ってという三年計画の意気込みであった。

学内（附属図書館、五高記念館）にある資料をリストして一年目は手探りながらも無事盛会のうちに事業を締めくくることができた。二年目にはアイルランド大使が熊本大学にアイルランドの書物を寄贈して下さるために来熊なされたのと時期が重なり、展示会、講演会の初日にスピーチをしていただくという幸運に恵まれ、充実した船出であった。平成16年（2004）は開会時の講演としてははじめて外部からハーン没後百年と絡めた講演を得ることができた。

内容は熊本大学が所蔵しているハーン関係資料の一般公開（展示会）と大学内のハーン研究者による開会時と閉会時におけるそれぞれの講演会である。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）をもっと親しく知り、理解を深めていただくために熊本大学による地域への貢献を念頭においた企画である。

時期は秋であった。ハーンの命日が9月26日で秋の頃が相応しいと考えたからである。会場は一昨年、昨年と附属図書館中央館であったが、平成16年度はハーン没後百年という記念すべき節目の年ということで、彼が実際に教鞭を執っていた五高記念館で行うことにした。

期間は10月13日（水）から10月28日（木）までの16日間であった。展示会は概ね無事終えたが、台風23号の影響で途中の一日（20日）を休館にせざるを得なかったことをここに記しておきたい。

附属図書館には熊本大学学術資料調査研究推進室が併設されており、ここには特定研究テーマと



ラフカディオ・ハーン

して三つの研究の柱がある。有機水銀中毒による水俣病関係資料の研究、永青文庫を始めとする貴重な古文書史料の整理と分析を軸とした研究、それにラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の資料整備とその研究である。

ハーン研究については、熊本大学の小泉八雲研究会のメンバーが研究推進室メンバーとして、当初から参画協力して今日まで来ており、すでに『ラフカディオ・ハーン再考』（1993年）『続ラフカディオ・ハーン再考』（1999年）を上梓し、今日まで学術的にも評価されて来ている。

開会時の講演には熊本市の小泉八雲旧居の宮崎

啓子館長に来ていただき、『ハーン没後百年と八雲旧居』というタイトルで五高記念館の教室を使い、ハーンの生涯の概略と第五高等学校の教師として熊本に滞在していたことの意味と、明治27年1月に全校生徒に向けて行った『極東の将来』の結語の部分に触れて貴重な話をしていただいた。せっかくの機会でもあり、学生にも講演内容を聞かせたいという趣旨から授業の一環として学生諸君の参加を促し、ハーンへの理解を深めてもらった。

記念館の展示会場は一階の二教室を使い、それぞれの部屋にガラスケースを三つ配置し、最初は熊本時代の資料、次の部屋にはアメリカ時代の資料を中心に展示物の配列を行った。大学所蔵の貴重なハーン作品の初版本、ハーン直筆の試験問題、嘉納治五郎校長を加藤神社で送別した時の集合写真（ここにはハーンのお嘉納治五郎、秋月胤永先生等が写っている）、ハーンがシンシナティ時代に書いた新聞記事のオリジナル（これは『シンシナティ・エンクワイアラー』紙と『シンシナティ・コマーシャル』紙で、実業家の檜山茂氏から熊本大学に寄贈を受けたもの）、第五高等学校時代の各種公文書資料、シンシナティとニューオリンズのハーンが居た頃の古地図（複製版）、秋月胤永の油絵の肖像画、ハーンがシンシナティで同僚のファーニーと発行した雑誌『イ・ジグランプス』（復刻版）、ハーンの肖像画、図書館報『東光原』に書いた熊本大学小泉八雲研究会のメンバーによるハーンの解説文の拡大パネル、当時の五高生の寮生活を写し出したパネル写真など、さまざまな角度から展示品の選択とレイアウトに工夫を凝らしてみた。期間中は終始受付を置き、来訪者への応対とセキュリティに配慮した。

展示期間中の来訪者は、授業の一環として二回の講演を聴いた学生を含む117人を除いて405人に達し、充実したものとなった。何よりも一般の方々の来訪が多かったことは、人々のハーンや五

高記念館への関心の深さを示唆しており今後の参考になるものと思われる。

これより先9月25日に、熊本大学主催の没後百年ハーン顕彰のためのハーン・レリーフ贈呈・除幕式を中心に多くのことが行われた。工学部百年記念館で行われた曾孫小泉凡先生によるハーン講演会『没後百年、ハーンの未来性』は身内の立場からみたハーンの興味深い話があった。続いて行われた岩岡中正附属図書館長の司会による、4人のパネリストによるハーン・シンポジウム『ハーンからの伝言=21世紀に向けて（近代化再考）=』では、ハーンの21世紀における現代的な意味をめぐって議論を深めることができた。今回の五高記念館における附属図書館主催のハーン展示会・講演会は先行事業と連動した大学主催の一連のハーン事業の一環であったといえよう。

最後の閉会講演は西川が『ハーンの遺産』というテーマで行った。ハーンは家族を中心にした人間の絆とモラルを大切にすることを伝えたが、これは混沌として犯罪や戦の止まぬ現代社会への警鐘としてハーン作品が読めることを説き、同時にジャーナリストという視点でハーンは日本をその心で取材・理解し、これを『東の国から』西洋に向かって暖かい『心』で作品を西洋に紹介し、結果として西洋と東洋の橋渡しをした存在として位置づけられることを指摘させていただいた。

平成16年度はジャンプの年であった。この年に五高記念館でハーンの展示会・講演会を行うことが出来たのは幸いであった。これで三年間続けたこの事業にひとまずコンマを打つことになるが、今後はこれをさらに発展させたものを考えていかなければならないであろう。大学は終始研究と教育の場である。そのことを前提にしたうえで、大学の社会貢献のあり方として国際性と地域性という二本の柱は今後もますます重要なものとなっていくに違いない。

（にしかわ もりお 教育学部教授）

# 「フィクション」と「わな」のあいだ

—『棠陰比事』における「いつわりの術（譎）」について—

若曾根健治

ある作品の宣伝文句に、こうあります。  
「表題は「名裁判くらべ」というほどの意味で、  
中国古来の名判決が2例ずつ72組収められている。  
推理ファンにとって見逃せぬ1冊。」

これは『棠陰比事』（とういんひじ・駒田信二  
訳・岩波文庫）のことです。南宋の桂万榮（けい  
ばんえい）が嘉定4年（西紀1211年）に官務の暇  
に編んだ裁判実例集で、一般に公案説話と呼ばれ  
ているものの1つです。公案とは、刑事・民事を  
問わず訴訟・審理・事件などを総称した中国古来  
の言葉といわれています。

『棠陰比事』（上海・四部叢刊続編子部版・以下  
では『比事』と略しておきます）は、わが国では  
西鶴の雑話物『本朝桜陰比事』に浅からぬ影響を  
与えましたが、それ自体、宋・鄭克（ていこく）  
撰の『折獄龜鑑』（せつごくきかん）を下敷きとし  
ております。前掲駒田信二訳で「鄭克いう」云々  
とあるのは、これによっています。

『比事』の記述のどのところが「推理ファンに  
とって見逃せぬ」のか、紹介できるとよいので  
すが、紙幅の都合でこれはまたの機会に譲って、私  
が『比事』を通読して興味を抱いたことを少々書  
いてみます。

それは、詐術を用いて犯人を探索発見する話が  
目立って多いことです。すでに『比事』第1話・  
僧侶の災難（向相訪賊・『折獄龜鑑』では第23話・  
向敏中詰僧）がそうです。

ある僧侶による殺人に冤罪の疑いを持った西京  
〔洛陽〕の知事・向敏中は役人を派遣し真犯人を  
探索させた。役人とは知らずある老婆が彼に問う  
た。「なんとかいう坊さんの裁判は、どうなった  
のですか」「昨日もう、市（まち）へ引き出されて

笞でたたき殺されてしまったよ」と役人はうそを  
いった（吏給云）。真犯人が見つかったところで  
もう罪には問われないよ、と応えた役人に老婆  
は、真犯人として何某（なにがし）の名を告げ  
た、という事例です。紙幅の加減で、他の事例を  
紹介できないのが残念です。



棠陰比事

『比事』に現われた詐術についてももう少し見て  
みよう。こうした詐術は普通の言葉でいえば、ウ  
ソということです。思うに、ウソの一方の端には  
「フィクション」があり、他方の端には「わな」  
があります。『比事』に出現する詐術は丁度これ

ら両端のあいだを行き来しているように見えます。

このうち「フィクション」については、ローマ法から「コルネリア法の擬制 (fictio)」の例を挙げておきましょう。

ローマ人が敵国の捕虜となり捕虜中に死ぬときは、奴隷として死ぬこととなります。ローマ市民



宣誓

法に従いますと、奴隷は被相続人にも相続人にもなりえません。この難点を解決するため、捕虜に関するコルネリア法（西紀前81年）が制定され、当該市民はあたかもローマ国内で死んだかのようにみなされました。これによって、ローマ人が捕虜となる前に作成した遺言が効力を持つことになりました。ローマ法の発展に寄与した要素の1つには、こうした「フィクション」があったのです。

もう一方の「わな」に関しては、とりわけ麻薬犯罪の摘発に向けられた警察のわな trap（日本風にいえば「おとり」）があります。ウソの最右翼ともいべきものです。道田信一郎の『わなと裁判：アメリカと日本』（中公新書）に詳しく挙げられています。

『比事』における詐術が目的とするのは、上記の1例にあったように冤罪を回避することにあります。他方で、それは立証方法の1つでもありました。この点については、鄭克が、隋の襄州の総管（軍事総督）裴政（はいせい）の言葉とし

て、こう述べているのを引くことができます。

およそ事件を明らかにするには2つの方法がある。「実情（情）」（情理）と「証拠（証）」であり、「いつわりの術（譎）」を用いるのは、これら2つの方法が役立たぬときである、と（『比事』第102話・『折獄龜鑑』第173話）。

このうち「証」にはじつに多様なものがあります。筆跡（原文は書・墨迹）・売買等の証書（質剂）・税の台帳（税籍）・村の戸籍簿（戸版）・検屍書（驗状）・遺書・証文（券）・檄文（檄）・印の字体（印文）・告訴状（告状）など、中国伝統の文字社会をありありと窺わせるものがあります。他には、負傷の状況、死体の調査・解剖、言葉つき、哭声、顔色などの表情、産婆を証人に呼ぶこと、などがあります。

もう1つの「実情（情）」とは難しい言葉で、その意味はよくは判りませんが、実情をつきとめるというのは、「相手が心の中に隠しているものをさぐりあてる（可以中其肺腑之隠）」こと（『比事』第68話・『折獄龜鑑』第192話）にある、とあるのから推して、起きた事件を粗略に扱わず事件の周囲を含め事件の意味するところを深く探るということでしょう。

じつは、私が『比事』に興味を抱いた端緒は、こうした立証方法にあります。同時代のヨーロッパの裁判と比べて驚嘆に値する違いであります。

『比事』が編まれた20年弱あとにドイツでアイケ・フォン・レプゴウ作の『ザクセンシュピーゲル・ラント法』（久保正幡他訳・創文社1977）が著わされました。ヨーロッパ法の歴史の上できわめて著名なできごとです。ここでは裁判における立証の中心は、宣誓補助者を伴った宣誓と、神判と決闘です。この法書の絵解き本が14世紀に作られましたが、この1つハイデルベルク本には、こうした宣誓と冷水神判の図が描かれています。

では、『比事』におけるこうしたさまざまな方法の背後に潜んでいる考え方はなんでありましょ

か。「牛を盗んだ者とその持ち主とが争いあって、互いに自分のものだと主張していた」という事態について鄭克はこう述べております（『比事』第102話・『折獄龜鑑』第186話）。「思うに、人の言によってあかしを立てようとする、いつわりをも聞くことになる（証以人或容偽焉）」

だから、「物によってあかしを立てる（証以物）」必要があろうし、証拠物がないときは「いつわりの術（譎）」を用いるということでもありましょう。判官は、人民から偽りを聞くことは耐えられないと考える。しかし他方で、みずからは人民にたいし「いつわりの術」を用いて構わないと考えます。

『ザクセンシュピーゲル・ラント法』は、裁判とは言葉によって身の証を立てるものと考えている。12世紀後半フランスで書かれた『狐物語』（鈴木覺他訳・白水社1994）をご覧ください。狼イザングランの告訴の言葉の、被告狐ルナールの弁論の言葉の、いかに凄まじいものかを。従って、偽りを聞くことがあってもやむを得ないと考えます。

かつて末広巖太郎は、人間が「公平」を要求しつつ同時に「杓子定規」を憎むといった一見きわめて矛盾したわがまま勝手なことを要求するのを、人間というのはこうした存在なのだから「仕方ありません」と語っていた（『嘘の効用』日本評論新社1954）のに、通じている考え方といえましょう。こうした人間のありかたを、そのまま容認する見方です。

『比事』に現われた「情理（情）」・「証拠（証）」・「いつわりの術（譎）」はすべて、「相手の口舌の争いを封じる（可以屈其口舌之争）」ことにあったのです。ヨーロッパの当事者中心の考え方にたいして、お上意識の面目躍如たるところでしょう。名判官の名判官たるゆえんでしょう。

そしてじつは、上記の3つの方法は、相互に繋がっておりました。しかも、「いつわりの術（譎）」を中心にして。鄭克はこう述べております。「譎



冷水神判

を以て実情をつきとめ（譎以求情）」「譎を以て証拠を取る（譎以取質）」と（『比事』第97話・『折獄龜鑑』第46話）。

これをもって、型通りに名判官主義と一言で片付けてしまうむきがあるかもしれませんが、ただ、民事であれ刑事であれ、事件の探索・発見・裁判の方法を、ある意味で＜理論化＞することによって後世に伝えようとしていたことは、間違いのないところです。

いずれにしても、以上は比較によってそれぞれの文化の特性が互いによく理解できる1つの好例といえましょう。

注1) 「棠陰比事」画像は、(宋) 桂萬榮編次、臺灣商務印書館、1966より。

注2) 「ザクセンシュピーゲル・ラント法」画像2葉は、Der Sachsenspiegel: die Heidelberger Bilderhandschrift, Cod. Pal. Germ. 164, Insel-Verlag, 1989より。

(わかそね けんじ 法学部教授)

# 人事異動

## ■異動（平成16年12月22日付）

医学系分館長

小川 尚（医学部分館長）

## 日誌（平成16年11月～17年2月）

- 10/30-11/1 第21回貴重資料展
- 10/31 同上公開講演会
- 11/5 第4回専門委員会  
第4回係長会議
- 11/8-12 西洋社会科学古典資料講習会  
（東京都）
- 11/9-30 図書館ガイダンス中級編
- 11/11 第4回図書館運営委員会
- 11/12 第2回図書館増築 WG 会議
- 11/18 第2回本荘・九品寺地区図書委員会
- 11/18-19 九州地区図書館実務者連絡会議（福岡県）
- 11/24 九州地区国立大学図書館協会総会  
（福岡市）
- 11/25 第3回図書館増築 WG 会議
- 11/29-30 国立大学図書館協会シンポジウム  
（広島県）
- 11/30 第5回図書館運営委員会
- 12/7 第5回係長会議  
平松守彦氏来館  
大学図書館等関連事業説明会（福岡県）
- 12/9 九州地区医学図書館協議会セミナー  
（大分県）
- 12/13 自動貸出機運用開始（中央館）
- 12/13-18 情報処理軽井沢セミナー（長野県）
- 12/15 埋蔵文化財発掘調査
- 12/15-16 会計基準実務研修
- 12/22 医学部分館が医学系分館に改称  
文献画像伝送システム利用促進 WG  
（福岡県）
- 1/19-21 学術情報リテラシー教育担当者研修  
（大阪府）
- 1/21 第3回本荘・九品寺地区図書委員会
- 1/25-27 日本古典籍講習会（東京都）
- 2/2 第1回医学系分館長選挙管理委員会
- 2/5 推進室（水俣病関係）シンポジウム
- 2/10 図書館長推薦委員会
- 2/22 第2回医学系分館長選挙管理委員会
- 2/23 医学系分館長推薦委員会



もと大分県知事平松守彦氏（第五高等学校 S.18卒）が12月7日、法学部における講演『分権改革と地域自立戦略』（主催：熊本大学拠点形成研究 B「脱近代社会における秩序形成の原理と政策研究」）の帰途、中央館に立ち寄られ著書17冊を寄贈された。

---

東光原：熊本大学附属図書館報  
第41号 平成17年3月刊

発行 熊本大学附属図書館  
〒860-8555 熊本市黒髪2丁目40番1号  
TEL. 096 (342) 2273 FAX. 096 (342) 2210

編集 柿本義行 浦田博臣 秋吉陽一郎  
伊波ひとみ 坂崎直美 大倉 桂

URL <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/tokogen/>

---